

研究機関等との共同研究による自閉症児のための カリキュラム検証・開発

－ 中間報告 －

柏木 雅彦¹

盲・聾・養護学校、小・中学校においては、自閉症の児童生徒に対する教育・指導方法の開発が重要な課題として挙げられている。本研究では、研修や相談との連関を図りながら自閉症児のための個別のカリキュラムの開発を進めることを通して、研究機関等との共同研究を行った。

はじめに

平成13年1月に文部科学省（当時の文部省）から出された「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」において、自閉症の児童生徒に対する知的障害との違いを考慮した障害の特性に応じた教育的対応の必要性が指摘された。さらに平成14年10月の「今後の特別支援教育の在り方について（中間まとめ）」においても、自閉症の児童生徒に対する教育・指導の方法の開発が重要な課題として挙げられている。

総合教育センターとしては、学校を支援する立場から、自閉症児の教育的対応について、個別のカリキュラムの開発を進めることが求められている。また、自閉症児のカリキュラムに関する研究にあたっては、研究の質の向上を図るため、研究機関等との連携協力も模索していく必要がある。

そこで本研究では、盲・聾・養護学校、小・中学校において、特に課題になっている自閉症児のための個別のカリキュラムの開発に関して、研修や相談との連関を図りながら、研究機関等との共同研究を行った。

研究の方法

本研究においては、研修講座や相談（教育相談、カリキュラム・コンサルタント）との連関を図りながら、自閉症児のための個別のカリキュラムを開発することを目指し、社会福祉法人仲町台発達障害センターとの共同研究を行った。

今年度は、研修講座の研修内容を活用したカリキュラムの開発、学校における構造化に基づく自閉症児のためのカリキュラムの実践例について、調査研究協力員、助言者と協議し検討を重ねた。

研修講座と一体化した研究を展開するための手法と

しては、仲町台発達障害センター職員等が講師を務める総合教育センターの研修講座「自閉症児教育専門研修講座2 - 構造化に基づく指導法 - 」との連関を図った。具体的には、2名の調査研究協力員が研修講座にオブザーバー参加するとともに、研修講座受講者の中から4名に研究への協力を依頼し、研修講座の内容を活用したカリキュラムの開発を試み検討した。

研究の内容

1 研修内容を活用したカリキュラムの検討

(1) 「自閉症児教育専門研修講座2 - 構造化に基づく指導法 - 」の実施

TEACCHプログラムの概論、自閉症の特性、構造化・アセスメント、自閉症の人の気持ち、アセスメント、自立課題の組み立てと実施 コミュニケーションの評価、コミュニケーションプログラム、コミュニケーションの理解、行動マネジメント等の内容について、講義・演習・グループワークの形式で3日間の研修講座を実施した。

(2) 研修内容を活用した実践

研修講座の研修内容を活用して、調査研究協力員及び研修講座受講者が、各学校における取組についての点検をするとともに、必要な部分の見直しを行った。また、研修内容をもとにした、新たな取組についても検討した。

(3) 各学校における実践についての検討

各学校における実践については、調査研究協力員会において検討するとともに、総合教育センターのシーガルネット（会員制電子掲示板）に本研究のフォーラムを設定し必要な情報の提供や意見交換等を試行した。

(4) 成果と課題

各学校の実態に応じて、研修内容を活用したビデオによる行動観察（コミュニケーションサンプル）、スケジュール表やコミュニケーションカードの作成、自

1 研究開発課 研修指導主事

立課題の設定、教室の構造化等についての取組が進められた。特殊学級では研修内容を活用した取組をすぐに導入しやすいが、養護学校ではクラス担任間で伝達講習を行うなど、導入に際しての共通理解がより必要であることが明らかになった。また、研修終了後のフォローアップを含めた専門家からの継続的支援の必要性があることが確認された。シーガルネットの活用に関しては、取り扱う内容や方法を明確にする必要があり、検討課題として残った。

2 学校における構造化によるカリキュラムの検討

(1) 中学校特殊学級の実践例

中学校特殊学級の開級にあたり、スペースの明確化、個別空間の設定、黒板には物を貼らず書かないなどの視覚統制の三点を留意して、教室環境を整備した実践例について検討した。ブースを全員分用意し、ブース内で1対1対応で個別課題の指導したり、流れがほとんど変わらない日課にすることにより、生徒が落ち着いて学習に取り組むなどの成果が見られた。また、構造化によって枠組みを明確にすることで、生徒の実態がよく見えてくることが明らかになった。

(2) 養護学校（施設訪問教育）の実践例

こだわりが強く、パニックや問題行動の多い自閉症の生徒に対して、生徒の思いを洞察しながら進めた指導について検討した。年齢、体位、コミュニケーション力、認知・理解、社会性等によるグループ編成、場所・時間・人・ものの構造化、認知教材、作業教材、屋外活動、音感、体育等のプログラムの展開により効果を上げた。プログラム作りには、仮説に基づく取組の検証が必要なこと、環境が変わって落ち着いた場合、何が落ち着く要因なのかを明らかにし、その環境を崩さないことが大切であること等を確認した。

今年度は、自閉症児のための個別のカリキュラムの開発として、主に研修講座の研修内容を活用したカリキュラムの開発、学校における構造化に基づく自閉症児のためのカリキュラムの実践例を通して、カリキュラムのモデル案や教材の作成に向けた検討を行った。

自閉症児に関するカリキュラムについては、一人ひとりのニーズに応じるということから、教育相談やカリキュラム・コンサルタントの中でモデル案や教材等が扱われ、活用されることが望まれる。

また、最も重要なことは、教員一人ひとりが個別のニーズに応じたカリキュラムを開発できる力量をつけることであり、そのためには、研究機関等と連携しながら研究、研修、相談の一体化による人材養成とそのネットワーク化を進めていく必要がある。

次年度は、今年度の成果について分析・検討を加えていきたい。また、教育相談やカリキュラム・コンサルタントにおける相談事例に基づいたカリキュラムの開発をするなど、研修、相談との連関を図った研究の展開を進め、成果を蓄積していきたいと考える。

多大なご協力をいただいた方々に深く感謝する。

[調査研究協力員]

小田原市立豊川小学校教諭	中村 悦子
県立藤沢養護学校教諭	森 恵
県立伊勢原養護学校教諭	水上 正樹

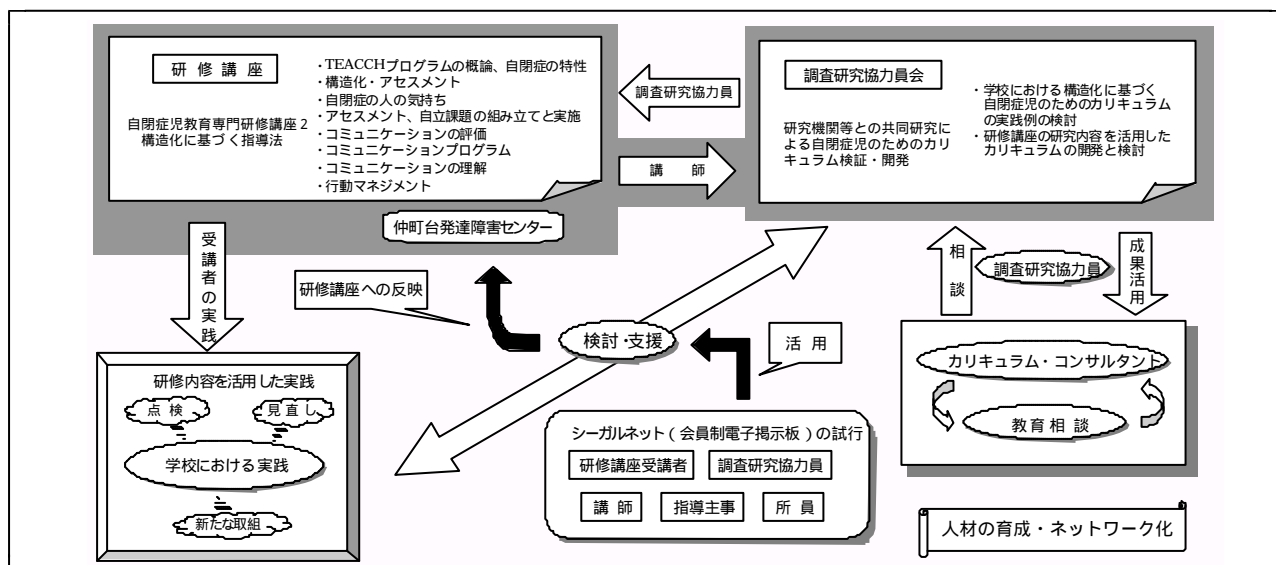
[助言者]

仲町台発達障害センター長	藤村 出
仲町台発達障害センター職員	山口 久美
藤沢市教育委員会指導主事	入澤 正樹
県教育庁教育部障害児教育課指導主事	鈴木友紀恵

[研修講座の受講者]

鎌倉市立御成小学校教諭	石井 裕子
藤沢市立大庭小学校教諭	吉原 直美
県立みどり養護学校教諭	鈴木 善之
県立三ツ境養護学校教諭	北村 武司

おわりに



第1図 研修・相談と一体化した研究のモデル図